

アジア歴史都市における都市構造と文化遺産

- サンボー・プレイ・クック遺跡群北寺院群における祠堂設計計画について-

早稲田大学創造理工学部建築学科

小岩正樹

本研究は、アジア諸地域における歴史都市の特質を把握し、現代における保存と開発の指標を得ることを目的としており、特にカンボジア王国の古代都市遺跡であるサンボー・プレイ・クック遺跡群を対象として、その歴史的文化の継承と持続可能な遺跡および周域保全を目指したものである。

サンボー・プレイ・クック遺跡群は、アンコール王朝より遡るプレ・アンコール期真臘国の首都であったとされ、カンボジア王国コンボン・トム州に位置する大規模都市遺構である。当該遺跡群はその歴史的重要な高さから、2017年7月にユネスコ世界文化遺産に登録され、現在までに遺跡群の修復・保護活動が精力的に為されてきた。早稲田大学もコンボン・トム州文化芸術局と協力し1998年より継続して調査・修復・保護活動を実施してきたが、その一方で、プレ・アンコール期の重要遺構である当該遺跡群における学術的研究はまだまだ豊富とは言えない。そのため、特にアンコール設計技術研究の一環として当該遺跡群の往時の設計計画を解明し、建造物の今後の保存修復や周辺域保全のためのゾーニング計画の指針を得ることを行った。

遺跡群は中央をオー・クル・ケー川が流れ、西側に一辺約2kmの環濠に圍繞された「都市区」が位置し、東側には北寺院群(プラサート・サンボーN群)、中央寺院群(プラサート・タオC群)、南寺院群(プラサート・イエイ・ポアンS群)の大規模複合伽藍と複数の伽藍・祠堂群から構成される「寺院区」が位置する。「都市区」では、碑文・漢籍史料による研究から、一定の政治施設等と大規模な人口を有していたことが指摘される一方で、煉瓦造祠堂が林立する「寺院区」は宗教センターとして機能していたとの見解が通説である。

このうち、寺院区の北寺院群における12棟の祠堂(N1, N7, N8, N9, N10, N11, N12, N13, N14-1, N15, N18, N22)を対象に、内室平面規模、身舎壁外法平面規模、基壇規模の各部を取り上げ、建設の際の基準となった寸法単位(造営尺)と、それを用いたユニット規模計画について、双方の組み合わせを考察することでそれぞれを導き出した。これら祠堂は互いに類似した形状をもつものもあるが、上記各部の寸法値は異なっており、かつユニット計画の取り方次第で、造営尺とユニット数の無限の組み合わせの可能性がある。そのため、後世のアンコール期の尺度体系を参考とすることで分析の幅を狭め、かつ導出の過程を明示することで検証の精度を高めた。その結果、それぞれの遺構が基準とした造営尺には相違が見られ、またユニット計画方法にも多様性があることが判明した。しかし、得られた造営尺はいずれもアンコール期造営尺と近似しており、結果的には当時代において適用されていたと考えられる歴史的尺度の想定につながった。現在までに行われてきた考古学発掘成果による各遺構の造営期の編年と比較することで、築造年代と施工精度の相対的な関連性評価を行うことができると考えられる。また、サンボー・プレイ・クック遺跡群における祠堂の平面形態は、八角形平面、方形平面、長方形平面のものがみられるが、それぞれに対して内室平面規模と壁体厚さとの相関関係を分析したところ、いずれも前者の半分前後を壁厚とする志向性があることが認められ、屋根荷重を支える構造計画にもユニット計画が作用していた可能性を指摘することができる。

以上の成果は往時の設計理念を復原することができたと言え、サンボー・プレイ・クック遺跡群の煉瓦造祠堂が壁体の崩落、傾斜、剥離などの危機に瀕している現状に対して、修復や当初復原に向けた目標設定をより明瞭に示すことができると考えられる。今後は、得られた尺度体系をもとに伽藍における祠堂配置方法の復原考察を行い、寺院区ならびに都市区の区画設定という都市計画手法に見通しをつけ、いまだ深い森林の中にある遺跡群に対するゾーニング計画を検討することを通じて、遺跡保全へと貢献してゆきたい。